

3

子育て支援の輪どこまでも

福岡県大野城市

1 ワーカーズ？ 何それ！

◇理解されないワーカーズの原則

福岡市の隣に位置する人口一〇万人弱の大野城市。一〇校ある小学校の施設内か隣接して、学童保育所が一カ所ずつ設置されている。保護者が勤務などの都合により保育できない家庭の一年生から三年生が対象で、授業終了後から午後五時まで開く（延長は一九時まで。春、夏、冬の長期休暇中は八時から）。二〇一〇年度は、約六五〇人の児童を約六〇人の指導員が保育した。

かつては市直営で、嘱託職員が指導員を務めていたが、二〇〇四年度から民間委託され、地元NPOが運営。〇八年度からはNPO法人ワーカーズコープ（以下「ワーカーズ」）が委託を受けた。市には運営団体を変更したい事情があったようだが、指導員や保護者にはまったく予期せぬこと。「なんで！」という思いと、ワーカーズという見知らぬ存在への不信感が広がっていった。ワーカーズの側も、大野城市とは一度訪問しただけという関係。心をこめて企画提案

はしたものの、受託できるとは考えてもいなかった。

「委託先に選定」との連絡を受けたワーカースは、「子どもと親、地域住民がともに育ち・支え合う市民主体の子育てを!」というテーマで、市民に向けた講演会を急ぎよ開催。指導員の方たちにも、ワーカースの「七つの原則」(三七・四〇ページ)や、働く者同士が力を合わせ、利用者や地域と協同していこうという「三つの協同」を説明し、学童保育を協同労働で一緒に担おう、と呼びかけていく。

この話を聞き、「面白い働き方だ」と感じた人もいたが、突然の委託先変更に反発していたほとんどの指導員は、「私たちは学童保育の仕事をしなくて入った。七つだの三つだの関係ない!」と、まったく受け付けなかった。それに輪を掛けたのが、ワーカースで働く場合は最低一口五万円の出資が必要ということだ。一年後、事業所長を務めることになる星平順子さん(二九五六年生まれ)も、「働くのに、なんで五万円出さんといかんのか、全然わからなかった」と言う。

結局、地元NPOからワーカースに移った指導員は半数強にとどまる。それも、協同労働を理解したからではなく、「学童の仕事が続けることに変わりはないし、任された仕事をきちつとやればいい」(星平さん)という思いだった。

○仕事だけはちゃんとする学童に

大野城事業所長は高野和子労協センター事業団九州事業本部副本部長(当時)が兼務した。高野さんは、大分県日田市でワーカーズなどが主催したホームヘルパー二級養成講座を受講。センター事業団日田地域福祉事業所「虹の家」の創設(二〇〇一年三月)にかかわった。以来、地域に信頼される事業所を築いてきていたが、学童保育の仕事は初めて。まずは、地元NPOから移ってきた指導員たちの話を聴くことを心がけたという。

「何でも言ってください、そうでないとわからないから」と率直に伝え、常勤・非常勤を問わず、全員が参加して話し合う会議の場も設けた。また、給与検討、企画書作成、フォローム、大野城まつりの四つの委員会をつくり、全員がどれかに参加するように呼びかける。とりわけ、入所希望の障がい児を全面的に受け入れるようにしたことは大きな転換だった。

しかし、ワーカーズに反発したままの指導員は、「私たちは学童保育をするために残った。ワーカーズなんて関係ない」「仕事おこしなんて簡単にできるわけじゃないじゃない」という発言を会議でも堂々と繰り返した。また、自己流の子育てにこだわる新しい指導員もいて、日々の保育のあり方をめぐる混乱も一部では続く。

やがて一年が過ぎ、ワーカーズとしてのある程度の道筋をつける役目は終わったと考えた高野さんは、次の事業所長として星平さんに白羽の矢を立てる。星平さんが責任者を務めていた学童保育所では落ち着いた運営が行われ、保護者からの信頼も厚かった。指導員からは「管理

主義者だ」という批判も出ていたが、誰の話でも客観的に受けとめ、「それはやらなければならぬことですから、やりましょう」と、正面から事態に向き合おうとする星平さんの姿勢を信頼したのだ。

頼まれるとイヤとは言えない性分の星平さんは、「とにかく仕事だけはちゃんとする学童にしたい。子どもたちが楽しく遊んで、明日も来ようと思える学童にしたい」と、この依頼を引き受けることにした。協同労働についてはまだよくわからなかったが、「ワーカースは正しいことを言っている」と感じてはいた。

副所長に就任したのは、高野さんからすると娘のような瀨崎佐和さん(当時は旧姓の角田さん。一九七六年生まれ)だ。私立保育園に六年間勤務していた瀨崎さんは、「このままでは自身が成長しない。広く社会を見て、もっと自分を豊かにしないと、子どもたちのためにならない」という思いにかられて退職。ハローワークでワーカースコープの求人を目にし、「地域に根ざした仕事」という言葉に惹かれて就職した。二〇〇八年三月のことだ。

◇指導員と親の現実にあふたって

二〇〇九年三月から、星平さんと瀨崎さんは、西鉄春日原駅^{かすがぼる}近くに借りていたワーカースの事務所に出勤する。まずあつかったのは、「事務所(ワーカース)対現場」という構図でものをみる指導員たちからの電話だ。すぐに、「事務所がやってくれるんですよ」「人を増やしてほ

しい」と要求してくる。保育のあり方や運営についても、現場で話し合って解決しようとするのではなく、愚痴を言う。星平さんは、もっと主体的に仕事をすべきだと伝えるとともに、電話の主がいる学童保育所に足を運んだ。すると、こんな姿が目に入ってきた。

「子どもを見守る」という言葉どおり、本当に見守っているだけで、子どもに即した言葉かけもない。騒いでいる子どもたちに「静かにしなさい!」と言うだけで、ルールも決めず、子どもたちが柵に乗って遊んでいても放置している。同僚の意見に耳を傾けようとしな……。

当然、保護者からのクレームも多かった。「学童が面白くないと子どもが言っている」「指導員の口のきき方が悪い」「子どもに対して冷たい」。こうした苦情は、保護者から市の子育て支援課に届き、市から星平さんに伝えられた。星平さんは「全部が当たっているわけではなからう」と思いつつも、クレームの内容を伝え、「私は悪くない。謝りません」と言う指導員も。星平さんがもっと深刻に感じたのは、保護者の状態だ。子どもの送り迎えの際に車から絶対に降りない。帽子を目深にかぶって目も合わせない。自分の子どもから触られるのもイヤと言う親もいる。夏休みになると、こんな例も報告された。

コンビニで弁当を買って、一二時半に届けに来るお母さんがいる。いつも顔を子どもの前に突き出し、「食べるの! 食べないの!」しか言わない。そのお母さんがなかなか来ない日があった。勤め先に電話すると、「今日は会社の研修で抜けられません。食べさせなくていいです」という返事(お父さんに連絡が付き、後から食べさせることができた)。また、欠席の連絡が

ないため、家に「今日はお休みですか」と電話すると、「学童に行く行かないは勝手でしょ!」とキレた感じで対応される。「お子さんの体調がよくないので、お迎え、早めに来られませんか」と促しても、保護者はなかなか来られない。

失業や勤務時間短縮で保護者が在宅になったからと、学童保育所を退所せざるをえなくなる子どもも増えてきた。子どもたちを支えるためには、子どもを相手にしているだけではダメだ。保護者の相談にのり、保護者を支え、地域と結びつかなければならない。星平さんたちはそう考えるようになっていった。

◇傍観から参加へ

星平さんと濱崎さんは、三カ月に一回程度開かれる労協センター事業団全国事業所長会議や九州事業本部の集まりに参加するたびに、もう一つ大きな課題に直面していた。「所長の役割とは」と問われ、「仕事をおこそう」という提起が「降ってくる」(星平さん)のだ。

自分たちが仕事をおこす、などとは考えてもいなかったが、「子どもたちのために、何かできることはないか」が常に頭にあった二人は、学童保育の仕事に関わるなかで、何が足りないか、何が必要なかが見えてきていた。保護者の相談にのるとともに、指導員の力量を高めていくことを国や自治体の制度や資金を利用した仕事としてできないものか。二人は企画書を作成し、夏休みが終わるころから市の子育て支援課に通いだす。

一方で星平さんは、「このままでは私が辛くなる」という思いを深めていた。新たな仕事おこしを濱崎さんと二人だけでやるのでは、みんなとますます遊離してしまう。みんなの仕事おこしに取り組まなければ意味がない。方針の提起と現場がつながっていなければ自分のなかで分裂が起き、辛くなる。

「事務所がやれ、誰かがやってくれて当たり前」という指導員では、子どもに悲劇。子どもにとっては、目の前のあなたが大事なんだから。すべてに主体性をもってほしい！」

七月の大野城事業所会議(当時は三ブロックに分けた事業所会議を毎月、全指導員の会議を学期ごとに開いた)では、提案文書に「いまだにある『学童の指導だけしていればいいのだ』の意識の打破をはかりたい。自分たちは、ワーカーズ大野城事業所の組合員であり、全国の仲間と協同しているのだという自覚を持つようにしていきたい」と書き、行を変え、大きな文字でこう呼びかけた。

「傍観から参加へ」

2 労協宣言

◇「知りません、わかりません」は、なしに

「なんだ、ここにすべてが書いてあるじゃないか！」

九月の全国事業所長会議で、「七つの原則」の読み合わせをしていたとき、星平さんは目が覚める思いがした。

「協同労働を通じて『よい仕事』を実現します」「すべての人びとが協同し、共に生きる『新しい福祉社会』を築きます」などの「使命」に続き、詳しく示された運営原則の一項、一項が、読み進むごとに、ずんずんと身体の中に入ってくるのだ。

「ちゃんと仕事をしなさいっていうことも書いてあるし、仲間と仲良くしなさいってあるし、建設的で前向きな意見を言うようにするんですよ、というようなことも書いてある」

ワーカーズで働く場合、こうした「原則」などの説明を受け、「内容を理解した」という書面に署名・捺印した「承諾書」を提出する。星平さんも出したし、原則の読み合わせも会議で経験していたが、右の耳から左の耳へと抜けていた。だが、今回は違ったのだ。

その直後の大野城事業所会議で星平さんはこの原則を読みあげ、みんなに強く求めた。

「あなたたちは、七つの原則に則ってワーカーズの組合員としてきちんと仕事をする、ということを最初に承諾してますよね。承諾したからには、『知りません、わかりません』は、なしにしましょうよ。今日から私も変わる。みなさんも変わってください。これからは、ワーカーズ、労協の現場としてやっていきます。本当に子どもを受けとめ、よい仕事をやっていこうと思つたら、自ずと三つの協同の視点が必要です。私は、七つの原則、三つの協同は間違いない、人間として当たり前のことだと思う。まずやってみて、違つたら言ってください。あなた

のワーカーズですよ、あなたも同じ仲間じゃないですか。一緒にやっていきましょよ」

星平さん自身が、やってみて、実感して、言葉にしたワーカーズへの確信だからでもあろう。それは、「ものすごい迫力、剣幕で、全体がシーンと静まりかえった」(平本哲男九州事業本部長)という。

◇娘が身をもって教えてくれた

星平さんは、大学を出てから三年間、全校児童八人という小学校の教員を務め、結婚退職。子どもが一人立ちした後は受験産業で働いた。高校を訪問し、模擬試験の商品を売る。営業成績はよかったという。

そのころ、二〇〇倍という難関を突破して高校卒で国家公務員の仕事に就き、東京に出た長女が、うつ状態になる。職場に行けなくなり、「私が壊れていく」と苦しさを訴えてきた。

「やがて娘は回復しましたけど、あのときが私の一つの転換期でした。それまでの私は、市場経済至上主義、競争社会のなかで何も考えず、もっと勉強しなさい」と子どものお尻をたたき、〴〵あるべきだ」とずっと言ってきたんです。自己中心的で、人に対して自分を押しつけてきた。でも、〴〵丸ごと私を受けとめて」と娘が私に訴えてくれたのでは」

この体験がなければ、ワーカーズに出会い、協同労働という働き方を知ったとしても、引きこもりとか、つまずいたとか聞けば、「努力が足りないんじゃないのー」と切り捨てる人間に

なっていたのではないか。この体験があるからこそ、「みんなのなかには、協同労働への共感、人のために少しでも役に立ちたいという思いが本来あるはずだ。それを表に引き出すことが自分の役割だ」と考えることができたのだろう。星平さんはそう振り返る。

この会議後は、毎月の事業所会議や月間報告書などでも、「よい仕事」「利用者との協同」「地域との協同」「仲間との協同」という項目を立て、その視点で特徴的な出来事を各現場から報告してもらうようにした。すると、「なんか知らんけど、ワーカーズはイヤだ」という感情論での批判がなくなっていく。「自分たちがふだんやっている地域との交流会が三つの協同なんだ。協同労働ってそんなにむずかしいことじゃないんだ」という反応も出るようになった。

こんな変化を生み出す転機となった事業所会議の日を、星平さんは大野城事業所の「労協宣言の日」と名付けた。

3 怒濤の攻め

「怒濤の攻め」——「労協宣言の日」以降の取り組みを、星平さんはこう自賛する。日々の学童保育業務にとどまらず、子育て相談という仕事をおこし、地域懇談会を開き、自主学習会を国の制度を活用して開いた。さらに、「よい仕事研究交流集会」の開催、「基金訓練」(四九ページ参照)からの仕事おこし、と一気に取り組み始めたのだ。

◇市の知恵で実現した子育て相談業務

子育て相談業務を企画したのは、保護者に「学童に行く行かないは勝手でしょ!」と言われたという報告を聞き、こう思ったからだ。

「こういうお母さんには友達もいないんだな。誰か一人でも怒りの受け手がいれば、その人に話すことで緩和されるけど、自分だけでかかえこんでいると、あふれ出るんだな」

子育て相談は二〇〇九年一〇月から半年間行った。各コミュニティセンターでは一八時〜二〇時、学童保育所では延長保育の時間である一七時〜一九時、いずれも月二回だ。相談員は、大野城事業所の学習会で「人の話を聴くということ」という講義をもらった先生などに依頼した。この相談業務は当初、厚生労働省の「ふるさと雇用再生特別基金事業」を活用する企画として大野城市の子育て支援課に提案したものだ。その事業の予算はすでになかったが、保護者の精神的な不安定さを感じ、なんとかしたいと苦労していた同課がいろいろ調べ、「緊急雇用対策の地域子育て創生基金事業なら」ということで実現した。

◇ショックを受けた地域懇談会

保護者や地域の状況がさらに深くわかり、子どもたちを見る指導員の視野が一気に広がる契機となったのが、地域懇談会だ。一月から八つの学童保育所で連続開催した。星平さんが所長になって三カ月目の六月に開かれた労協センター事業団第二四回総代会の議案提起で、「今

の困難を本当に地域で支え合う拠点となる地域福祉事業所をつくりあげよう。そこに向かううえで、地域の現実、困難を共有し、連帯と仕事おこしを呼びかける地域懇談会を無数に開こう」と呼びかけられたのが、開催のきっかけである。

会議で提案すると、「どうして学童の指導員が地域の懇談会を開かないといけないんですか？現場は忙しいのにどういう意味があるんですか？」という質問も出たが、「私たちは協同労働の協同組合で、七つの原則にも、地域が求めるものをつかむようにと書いてあるでしょ」と言い切ると、「どうやったらいんですか」という問いに変わっていった。

一回目の懇談会では、シングルマザーの保護者が一番苦しかった時期のことを打ち明けた。「一生懸命子育てをしていましたが、相談するところもなく、一番煮詰まったときは、人とかいたくなくて外部との接触を避けました。追い込まれると、手を貸してくださいと言う気力も萎えて、引きこもってしまう。気力が枯れ果ててしまうんです。いまは気持ち的に楽になったけど、ほんとに苦しかった」

孤立して一番苦しんでいる人には支援の施策が届かない、ということとはよく指摘されているが、彼女の子どもが通う学童保育所の指導員たちはこの話に大きなショックを受けた。

「あの子のお母さんがそんなに苦しんでいるなんて、まったく知らなかった」

濱崎さんも、「そこまで追い込まれる前に、気軽にに行ける場、気軽に話せるネットワークが絶対に必要だ」と痛感したという。

地域懇談会は、平日の一九時からにもかかわらず、どこの会場でも主催メンバーの他に二〇人前後が参加した。各学童保育所の指導員が「子どもたちを見守るネットワークをより強いものにしませんか」と呼びかける「ご案内」チラシを持って、学校長、地区の区長、民生委員、子ども会役員、保護者などを訪ね歩いた成果だ。懇談会では、一カ月六五〇〇円という学童保育の費用が払えない家庭、親が深夜まで仕事をして子どもは毎朝学校に遅刻する家庭などの問題が浮き彫りにされるとともに、前向きな申し出もあった。

「公民館を居場所として開放しているので、利用してほしい」（公民館長）

「学童の子どもの帰宅時間に合わせて、まわるようにしたい」（夕方のパトロールボランティア）
そして、感想文には「私たちの知らないところで地域の方が子どもたちをしつかり見守ってくださり、子どもたちの安全や成長を真剣に考えてくださっていることに感激しました」（指導員）、「地域の方々とふれあう時間がなく、今回初めて多くの方に囲まれていることを実感しました」（保護者）などの声が寄せられた。

◇自主学習会から「もう一回チャンスを」

一〇月からはほぼ毎週、午前一〇時から二時間の二時間、指導員を対象に一五回にわたる自主学習会も、やはり緊急雇用対策事業の「障害児預り事業」を活用して開いた。「大きく変動する社会で子どもたちもさまざまなニーズをもっている。とくに、障がいや情緒不安定などの問題を

かかえた子どもたちは、集団で保育していくことがむずかしい場合が多い。子どもや背景にある家族、環境への理解を深め、関わりのスキルを身につけていく」のが目的だ。

受講料は無料としたが、時給は出ない。星平さんたちは、数人来ればよしとしようと話していたが、毎回二〇人以上が参加した。講師を引き受けてくれた児童福祉分野の専門家である山口祐二さんが、状況をつかむためと言って、事前に全部の学童保育所をまわってくれたことも大きかった。学習会では子どもの悩みや保護者の状態を出し合い、もったいい方法があったのではと保育のあり方を振り返る時間もあった。そこからは、感動的なエピソードも生まれる。

子どもに対して、「なんで、できんとね！」と毎日言い、保護者にも「またできんかったですよ」と告げる指導員がいた。私がこの子をなんとかしやらんといかん」という思いからなのだ。しかし、叱られるばかりの子どもは学童がイヤになり、やめることになった。山口さんはこうアドバイスした。

「できない子どもには、できない理由があります。子どもには『ちゃんとしなさい』ではなく、『なんで、できんとお？』『できるようにするには、どうしたらいいとお？』先生に言うてみらんね」と、寄り添わなければいけないんですよ」

この話を聞いた指導員は保護者にお願した。

「やめないうでください。もう一回チャンスをください。私たちとお母さんと、お子さんも入れて話しましょう。学童でどんなふうに過ごしたらいいかを」



9月に行われたよい仕事研究交流集会では昔遊びを紹介した現場も

この子どもは学童を続けることになった。

◆無関心な親と思っていたが

明けて二〇一〇年一月には「よい仕事研究交流集会」を開いた。ワークーズ本部が毎年開く「全国よい仕事研究交流集会」への出場現場を選ぶ予選でもあったが、一〇の学童保育所すべてからほとんどの指導員が参加し、自主学習会の成果を確認し合う場ともなる。「発表し合うことが楽しい」「次はプレゼンをもっと工夫したい」という声が出たほどだ。

同年九月に開かれた二回目のよい仕事研究交流集会は筆者も傍聴したが、七分という短い時間に、各学童とも数人が、昔遊びの実演などのパフォーマンスも取り入れ、焦点をしばった報告をした。「三つの協力を力に、利用者、家族、地域とともにつくるよい仕事の

到達点と課題」という全国統一仕様でのレポートが添えられ、四分の質疑応答時間に山口さんのコメントもあり、課題が鮮明にされていく。

もつとも胸を打たれたのは、子どもたちと話すなかで保護者の現実を知り、保護者に対して否定的な見方をしていたことを反省した、という横井奈津美さん（一九八八年生まれ）の話だ。横井さんが四月から働き始めた学童保育所では、二年生と三年生の保護者が学童に関わりたくない感じで、連絡帳に何を書いても反応がない。無関心な親だなと思っていたが、三年生は三分の二が父子・母子家庭。「お母さん（お父さん）はいつ帰ってくるの？」と聞くと、「帰ってくるのは夜九時。それまでおばちゃんの家にいる」「一人でうちにいる」「ご飯は夜一〇時」というような返事だった。

「ものすごく忙しくて、子どもとふれあう機会もないのです。そこをわかって保護者に働きかけていくと、『いつもありがとうございます。自分の仕事で精一杯で、宿題も全然見てやれません。子どもにいろいろ話をしてくれるだけでも本当に助かっています』というような言葉が返ってくるようになり、まったく顔を見せなかった保護者が『うちの子、どうですか』と聞きにこられるようになりました」

◇障がい児を全面的に受け入れて

発表されたテーマでもっとも多かったのは、障がい児の発達に関するもので、半数の五カ所。

これには、ワーカーズが受託してから障がい児を全面的に受け入れてきたという背景がある。

「エーッ、どうすればいいの」から出発して、「何かあるたびに指導員みんなで話し合い、苦労や問題点を共有でき、協同労働で信頼が深まった」「一番の先生は学童の子どもたちでした」とまとめた指導員は、次のような事例を報告した。

「一年生に障がいのある子が二人入所。甲状腺機能低下症などで足腰が弱く、『他の子どもとちよつとぶつかっただけで転倒する』と保護者から聞かされていた子どもが、みんなと一緒に遊ぶなかで走れるようになりました。また、夏休みの昼寝の時間、指導員が何を言おうが絶対に寝なかった自閉・精神遅滞の子どもが、一緒に遊ぶ三年生に言われるとボタンと寝たんです」

「ダウン症で難聴の児童との関わり」をテーマにした発表者は、指導員が手話教室に行き、それをみんなで覚え、「おいしいね」「ありがとう」などのカードを作り、子どもたちみんなが語りかけるなかで、学童の雰囲気も温かくなったと報告した。この一郎くん(仮名)は、落ち着きがなくなると、叩く、蹴る、髪を引っ張る、物を投げるなどの行動をとることもあるが、半分の子どもと一緒に宿題をし、おやつを食べ、遊ぶ係を自分から希望して経験したという。

星平さんは、発表に立ったメンバーに、通常の会議ではあまり発言しない指導員がかなりいたことに注目する。

「障がいのある子どもを保育するのは本当に大変だけど、仕事を極めるとか、仕事を掘り下

げるとかするなかで、みんなに聞いてほしいという思いが出てくるのでは」

そして、以前に委託を受けていた地元NPOとの大きな違いを指摘した。

「そのNPOの理事は、障がいをもった子どもさんはなるべく預からないようにしたいと話していました。指導員の先生にはあまりいい条件でなく働いてもらっているから、これ以上負担をかけるのはしのびない、と。私たち指導員も、私たちのことを考えてくれてるんだなと思っていました。でも、ワーカースでは、そんなこと言ってる人がいたら怒りまくりですよ。誰が学童の主役なのか！ 指導員なのか、そこにいる子どもなのか！ って」

◇子どもとつながるすべてを支援

二〇一〇年七月には、基金訓練の社会的事業者等訓練コース「地域子育てマネージメント科」を開講した。ワーカースが全国的に取り組んでいる事業で、修了生らと居場所づくりをめざそうという構想だ。濱崎さんはこの講座を準備するにあたって、「大野城事業所・居場所づくりへの道々本物の子育て支援を目指して」というタイトルのニュースを発行。その第一号（二〇一〇年三月発行）にこう書いた。

「学童の運営では、社会に疲れきって、外部との接触を避けたがる保護者や、毎日イライラして精神的に落ち着かない保護者に出会い、地域懇談会では、子育てや生活に行き詰ったシングルマザーの話や、地域社会の分断を感じました。子育て相談では、誰かに話を聞いてもらう

だけで、次の日も頑張れるという保護者や指導員の様子も見てきました。週一回の自主学習会で、そうした現状を分析し、学ぶ中で、子どもとつながるすべてのものを支援することが本物の子育て支援だと感じました」

そして、その「すべてのもの」には、「保護者、地域」はもちろん、「子どもの成長や行く末」も入ること、その支援とは、「安心して子育てができる暮らしを保障し」「子どもの成長や行く末までを見守ってくれるような地域をつくる」ことだと続けた。

濱崎さんは、小学校一年生の夏休みを母の実家がある町の公民館で過ごしたことがある。知らない小学生から高校生までと一緒に遊び、宿題をした。とても楽しい思い出として残っているという。それだけに、「地域丸ごとで安心できるまちをつくりたい。子どもたちがおとなになったとき、自分もこういうことをしてもらったんだな」と考える、よい循環をつくってきたい」という言葉には実感がこもっている。

「子どもとつながるすべてのものを支援する」と書いた思いを改めて聞いてみた。

「人もつながっているし、時間もつながっている。支援っていうのはずっとつながっていく。特別なことじゃないんです」

「七つの原則、三つの協同に則ってきちんとやっていこう」という労協宣言がワーカーズとしての出発点だったとすれば、子どもたちや保護者の現在と未来をつないで地域のネットワークを広げていく「子どもとつながるすべてのものを支援する」という決意は、協同労働による

「子育て支援のよい仕事宣言」ともいえるだろう。

◇主体性・当事者性を買いて

こうしたなかで、ワーカーズらしいモデル的な学童保育所も生まれてきた。川本美紀子さん（一九五二年生まれ）ら三人の指導員が働く学童保育所は、その一つだ。川本さんは、ワーカーズの説明を聞いたとき、「新鮮で面白い、自分でも何かやれそうだ」と直感したと言うが、思う存分にやれるようになったのが「一緒に考える」ことだ。

ある土曜日の朝の会で、「今日の流れ」を話しているとき、「先生、人は何のために生まれてきたのですか？」と、三年生の男の子が聞いてきた。子どもは突然ひらめく存在、「いまその話をしてる時間ではないやろ」と言ってしまうえば、せつかくの芽がつぶれる。そう考えた川本さんは、この問いをその場でみんなに投げかけた。

「お金もうけするため」

「おいしいもの食べるため」

「がんばるため」

思い思いの答えが返ってきた。幼いころ同じ質問をお母さんにしたという川本さんの答えはこうだ。

「先生は長く生きてきて、わかったことがあるよ。人を幸せにするためじゃないかな」

子どもたちは「正解」を求めているのではない。一緒に話し合い、考える過程で、それなりに納得するし、自分が尊重されていることを実感するのだと川本さんは言う。

「子どもたちは、私がちよつと言ったことから世界をすごく広げて、逆に投げかけてくる。だから、私はもつと考えていかなかん。人と人はそういう間柄でいたいなと思うんです」

働く者同士の関係でも、「それは必要なことです」とか、誰かにスパンツと切られることがなく、やりとりができる点がいい」と、一緒に働く指導員たちは言う。

川本さんたちの仕事の最大の特長は、子どもの成長・発達に責任をもつ主体性・当事者性だろう。

別の三年生徹くん(仮名)は母子家庭の一人っ子。落ち着きがなく、突然わけもなく友だちを蹴ったり殴ったりしていた。話を聞こうとしても、ふてくされ、ときには学童を飛び出す。そんな徹くんの母親から退所の申し出があった。家でゲームをしていたと言い始め、暴力まで振るう徹くんに、言われるままに。退所してくれば、学童は平穩になる。しかし、それではないのか。

徹くんは一年生のときから、自分の気持ちをうまく伝えられない子どもだった。川本さんたちは、折り紙で動物を作らせ、その動物になった気持ちで、みんなの前で「お話」をする機会を設けるなど、自己表現ができるようにしてきた。けんかをして泣いていると、「そうされてどう思った?」と、気持ちを引き出す。「イヤな気持ちになった」と返ってくれば、「その気持ち

ちを相手に伝えてみて」「相手の気持ちも聞いてみて」「それを聞いてどう思った」と、自分の気持ちを伝える。相手と話す機会を広げていった。

徹くんには、喜びを共有し、悲しみを乗り越える力を身につける仲間との関わりこそ必要だ。いま学童をやめてしまったら、その力を身につけられなくなる。

しばらく欠席していた徹くんが登所してきたとき、川本さんは話した。

「徹くんを慕うとる下級生が毎日待つとつとよ。これから三年生として学童を引っ張ってほしい。お父さんの分までがんばっているお母さんを助けてあげて。何よりこの学童にはあなたが必要だよ」

こうして徹くんは学童を続けることになった。

父のいない現実をどう乗り越えていくかは今後の徹くん自身の問題だが、いまの徹くんを支えるのは、いま出会っているおとなの役割だと、川本さんは断言する。この過程で、担任の先生も徹くん「困ったときはいつでも話を聞くよ」と言うようになり、お母さんも徹くん「毅然と対応するようになってきたという。当事者性を貫いた働き方が、まわりのおとなたちの生き方にも大きな影響を与えているのだ。」

4 自前の事業をつくる

◇実績は関係ないでいいのか

こうした実践を重ねてきたにもかかわらず、ワーカーズは二〇一一年四月からの委託契約（今度は五年間）を結ぶことはできなかった。

二〇一〇年一〇月一五日、濱崎さんは選考結果の発表時間ピッタリにパソコンを開く。不安がまったくないわけではなかったが、大野城市の担当課の姿勢からしても継続は間違いないと思っていた。ところが、画面に映し出されたのは信じられない現実。パソコンが狂っているのではと、もう一台のパソコンも開いたものの、結果が変わるはずもない。

「みんな、自己変革もとげながら、必死に子どもたちのことを思い、向き合ってきた。この努力をなんだと思っているのか。この子育て支援事業の価値を、こんな形で踏みにじられてたまるものか」

なぜ選考されなかったのかという問い合わせに、市は「実績は評価に入れていない。企画書の点数で地元NPOが上回った」と答えたという。担当課の意見も考慮されなかったようだ。

こうした問題は各地で起こり始めており、公共のあり方をめぐる全国共通の大きなテーマとして、ワーカーズ全体でも取り上げられた。労協センター事業団の田中羊子専務は憤りを隠さ

ず、あるべき姿を問う。

「私たちは、市民が主体となり、もっと豊かな公共を生み出していこうと企画書に書き、プレゼンに臨み、それが採用されたが故に、それは行政とも共通の評価基準であると思ってきました。ところが、実績は関係ない」と言う。では、何のため、どんな効果を期待した民営化なのか。実際にどういう成果があったのかをふまえて、次のクールの政策目標を定め、委託先を選定すべきではないのでしょうか。利用者、当事者の声と評価が全面的に反映される公共のあり方を、市民が立ち上がってつくりださねばなりません」

星平さんたちは、自分たちに何が足りなかったのかという点からも、総括を深めていく。

「私たちは、自分たち指導員の都合ばかり考えていたところから、学童の中心である子どもたちに目を向けるようになり、子どもたちを取り巻く地域の課題や問題にも関わるようになっていったが、まだまだ内に籠っていた部分もあった。よい仕事をしていても、協同労働だから、ワーカーズだからこそ、という点については、保護者や地域に対する発信が足りなかったし、委託事業の枠から出ようとしなかったのではないか」

東京都墨田区や八王子市などでは児童館や学童保育所の運営をワーカーズで継続してほしいと、保護者や地域住民が署名運動までした。だが、大野城市では、学童の運営団体がどこになろうと、その指導員が学童に残ってくれるかどうかが保護者の関心事というところにとどまっていた面がある。地域懇談会は開いたが、そこから見えてきた地域のニーズに応える仕事おこ

しを地域の人びとと一緒に行うところには進んでいなかった。この総括に立って、ワークス大野城事業所は新たな歩みを始める。

◇元組合員が出資金を協力債に

学童保育の委託業務が終わることになっても、そのなかから見えてきた課題は何ら解決していない。とくに、障がい児の親と指導員と「なんとかしたいね」と話し合ってきたのは、障がいのある子どもたちの居場所づくりだ。

そこで、星平さんたちは、児童デイサービス（障害者自立支援法に基づく、一八歳未満の障がい児を対象とする支援事業）を行う「ほっと」の設立を急いだ。ここを核に、総合的な子育て支援の拠点ともなる地域住民の「いいいのスペース」をつくっていく構想も掲げた。そして二〇一〇年一二月から、障がいのある子に関わる方々のパネルディスカッションや「地域で居場所を考える会」などを次々に開催していく。基金訓練受講生も積極的に手伝った。

児童デイサービスの諸手続きには苦労したものの、その他の準備は「意外とスムーズに」（星平さん）進んだ。場所探しも順調で、目的を理解した大家さんから、二階建てで広い庭もある民家を安く借りられた。濱崎さんたちが近所にあいさつにまわると、全般的には子どもたちの声が聞こえるのは元気が出ていいと受けとめてもらえたという。

一方で、「知的障害をもっている子が家に忍び込んできたりしたら、私たちは年をとって

るから対処できない。子どもたちが外に飛び出さないようにしてほしい」という声も聞かれた。たしかに高齢化が進み、一人暮らしの老人が多くなっている。その不安や心配事に応える場としても、ほつとが拠点になるようにしていきたい。星平さんたちは、さらに意欲を燃やす。地域懇談会を開くと、約二〇人が集まった。障がいのある子どもをもつ保護者も六人が参加し、次々に実情を訴えた。

「買い物に行くときジロジロ見られ、避けられる」

「公園で『一緒に遊ぼう』と他の子どもに寄っていくと、『また今度ね』と、親が子どもを引き離す」

「急な発熱で近くの個人病院に行くと、関わりたくないという感じで、ろくに診察もせず薬だけ出される」

「家族からさえ、自分とは関係ない子、という態度をとられる」

「どこにも子どもの受け入れ先がなく、行き場がない……」

保護者同士で涙するお母さんの背中をさすり、「大丈夫よ、私もそうだったから」と寄り添い、地域の方たちも「私たちに何ができるか言ってほしい」と申し出てくれた。

もう一つの大きな課題は資金。ここで力を発揮したのが、学童保育の仕事で心を通わせた仲間たちだった。ワーカーズを脱退する場合、出資金は返還されるが、学童保育の仕事を続けたいと四月から地元NPOに移った人たちも含めて二六人が出資金の一部を協力債にまわす(一



約60人が集まった「ほっと」の開所式。最後まで残った人たちでパチリ

人一万二〇万円)という形で支援してくれたのだ。

◇「私がすごい」のではない

二〇一一年六月一九日、定員一〇人と小規模だが、大野城市で初めての児童デイサービスほっとの開所式が開かれた。大野城市の市議員も約半数の九人が出席。利用者の切実な思いと期待の声が胸を打つ。委託ではなく、自前の事業。協同労働を明確にした出発を象徴するかのようにな、「協同労働の協同組合七つの原則」が染め抜かれた手ぬぐいが記念品として配られた。

それから約一カ月。ほっとでは濱崎さんが責任者となり、協同労働の新しい質が生まれつつある。夏休みに入るとすぐ、登録者は定員の二倍の二〇人に達し、利用日数を制限したり、利用を断らなければならない状況になってきた。これに対

して、「なんとかしてほしい」「どうして入れないのか」と迫っていた利用者たちが、第二・第三の児童デイサービス開設に向かい始めたのだ。

そのうち二人はワーカーズの組合員となり、ほつとで働くようになった。地域での懇談会や説明会も障がいのある子どもたちの親が呼びかけ、司会などの運営を行い、星平さんと瀧崎さんはほつとの様子や思いを語ればよい。こうした状況が生まれたのは、瀧崎さんの働きかけによるところが大きい。

ほつとを訪ねてくる利用希望者は、ここが行政ではなく、ワーカーズという協同労働の協同組合が設立した施設であり、学童保育の仕事をしていた元組合員たちも出資したと聞いて、一様に驚嘆する。

「すごいですねえ！ 自分たちでお金を出し合って、こういう施設をつくるなんて」
すると、瀧崎さんは言う。

「それは違います。あなたがすごい、私がすごい、とかではなく、そういう力を引き出してくれる協同労働という働き方がすごいんです。お母さんたちも主体者になって仕事をおこしていける可能性があるんです。自分たちで仕事をつくりだすシステムがあるのです。そこに着目してほしいんです」

子どもたちのために、あれもしたい、これもやらねばと考えても、要求するだけ、不満を言うだけのときは、自分も苦しかった。協同労働に出会って、必要なものは仲間と一緒ににつく

ていけるんだと知った。お母さんたちはそれを知らないから、「どうしてやってくれないの」と不満だけ。それは辛いだろう。そう思うから、濱崎さんは一生懸命に伝える。

「協同労働という働き方なら、自分たちで仕事を立ち上げられるのですよ」

自分自身も三年前にワーカーズに入ったときは、仕事おこしをするなんて思ってもいなかった。逆にいえば、自分のように変わる人を増やせばいい。だから、自分が感じたことや学んだことをたっぷり二時間話す。そして、「あなたの願いをあきらめることはない。さまざまな社会的抑圧をはねのけていく仲間がいる、地域の力がある」、と伝え、最後にこう訴える。

「ここにも来られずに、孤立し、苦しんでいる親子がいっぱいいると思います。そういう人も引つ張ってきて、第二・第三の児童デイをつくりましょう。その子が大きくなったときの働く場も、一緒につくりましょうよ」

♡やりとりして、納得して働きたい

一方、地元NPOに運営が移って、児童保育所はどうなったか。

二〇一一年三月末、学童に入所を希望する障がいの重い子をどうするか、大野城市と地元NPOが協議する場があった。結論は「受け入れ困難」。要するに、「断る」というのだ。

市の要請で同席した星平さんは、ワーカーズなら間違いなく受け入れたのという悔しさを押し殺して聞いていた。だが、地元NPOの担当者が雑談の中で口にした言葉に、「なんだよ、

それ！」と、腹の中の虫が騒いだ。それは、「あの子のためにも学童の環境は適切ではないですよね、あの子のためですよね」という言葉である。星平さんはその場を振り返って、こう憤る。

「たしかに、障がい の程度は重い。学童の施設面でも、指導員の知識やスキルの面でも、受け入れはむずかしい。でも、人間はいろんな人に出会って、成長に彩りが加わる。そのチャンスが彼には与えられなくていいのか。受け入れられない場合でも、じゃあどうすればいいのか、代わりの受け皿を一緒に考えましょう、と言うのがしかるべきではないのか」

星平さんは一呼吸おいて、こう付け加えた。

「いままでの自分を見るようでした」

同じころにワーカーズ大野城事業所が開いた「三年間を振り返る」つどいでは、多くの指導員が、自由に発言でき、自分たちの主体性が守られた喜びを語った。

「それは、仕事に責任をもてるようにしたい、私たちは駒じゃない、という思いですよね。雇われている以上、雇う人の意思を越えてまで面倒なことをしようとはまず思わない。言われたことをやっていれば楽。だけど、責任をもち合うし、真剣に意見をたたかわせる、ということを経験したとたんに、みんな、そっちのほうが楽しいと感じたんです」

星平さんのこの指摘を、開所式に参加した多くの元ワーカーズ組合員の話が裏付けている。パート（ワーカーズでは非常勤と呼称）として働く指導員の一人は、会議が主任だけに限られ、

自分たちは参加できなくなったことについてこう話した。

「あれやれ、これやれ、と要求はされるけど、意見を言う場がないから、みんな不満に思っています。会議に出たからって、別に文句を言いたいんじゃないんです。意見を言って、みんなとやりとりして、ここに落ち着いたね、じゃ、それでがんばろうと、納得して働きたいだけなのに」

このパートの指導員は、地元NPOの担当者に「ワーカーズ的时候はみんな一緒に会議をしていましたよ」と伝えたが、「いままでの働き方は忘れてください」と切り捨てられてしまったそうだ。

主任の立場にいる指導員も、ワーカーズ的时候は一〇カ所の学童保育所全部を見られたのに、いまは自分のところしか見られなくなってしまい、視野を広げられない、と残念がる。

5 人を敬う労働

◎楽しく、貴重で、やめられない

「協同労働？ 何それ！」から始まって三年余。九州事業本部筑紫エリアマネージャーとなつた星平さんはいま、協同労働をどういうものと捉えているのだろうか。

「協同労働を一言でいうと？」と聞くと、「うーん」としばらく考えての答えは、「人を敬う

労働」。そして、この働き方が、自分中心の考え方を変え、人の痛みに思いをいたす社会、誰もが安心して年をとっていける社会に進む原動力になるのでは、と展望する。

地元NPOに移った川本さんから、まったく同じ答えが返ってきた。

「人を人として尊重する労働だと思います。雇用労働が大事にするのは人より企業、儲け。だけど、協同労働は人が大事じゃないですか」

子どもたちを相手に、いまでも協同労働の精神で働く毎日、楽しく、貴重で、やめられないと言う。

「私は、何もできないし、取り柄もないしと思ってたんです。でも、誰でもキラッとしたものがある。それをワーカーズはうまく引っ張り上げてくれた。人を尊重する協同労働だから、自由にものが言えて、人の気持ちを受けとめ、認め合い、お互いのよいところを引き出し合える。ありのままでもいいやん、あなたのもってるものを發揮して自分を輝かせればいいやん。そう思って、子どもたちの考えをどんどん引き出し、伸ばしていける。ワーカーズで三年間働いて、初めて開眼させてもらった気がします」

川本さんも、東日本大震災を経た日本社会全体に思いを馳せる。

「大震災で、一番大事なものは何かということが日本人のなかでわかってきた、目覚めてきたんじゃないかと思うんですよ。いままでは、企業とか仕事とかというのは営利主義、お金だったけど、そうじゃない。人として何が大切な。本質的なことは、人のつながり、支え合

いい、関わり合いだよねって。働きがいとか、やりがいとか、そういうところに人がちよつとずつ目覚めてきている。それが協同労働の働き方にも通じてるように思うんですよ」

◇新しい時代を切り開いて

埼玉県川越市に帯津^{おびつ}三敬病院がある。「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じる」という老子の言葉から、「患者さんや家族を敬い、看護師を敬い、すべての人を敬う」という思いをこめたと、帯津良一医師からうかがったことがある。ワーカーズ大野城事業所の組合員たちは、自分たちの実践のなかから「お互いに敬う労働」という定義を生み出した。

人間の尊厳性に一番の重きをおき、人と地域に必要な仕事を自分たちでおこし、根本的解決への展望を地域社会のなかで一緒になってつくりだす協同労働という働き方、生き方。それはいま、人間発達と社会連帯を中心にすえた、新しい時代を創造する力となりつつある。

二カ所目の児童デイサービス開設に動き出した大野城事業所。もちろん困難もある。まず資金の問題だ。今度は、保護者や地域にも大きく呼びかけなければ厳しいだろう。障がい児をもつ親同士の関係性も、大きな問題になるかもしれない。二カ所目ができてまだ足りず、「私はこんなにがんばったのに、なぜうちの子が入れないのか」という争いになるかもしれない。

濱崎さんは子どもを産みたいし、家庭とワーカーズの活動をどう両立させるか考えている。たとえ子育てで働ける時間が減っても、協同労働を推し進める立場でありたいし、これから子

どもを産み、育てる仲間が仕事を続けられるように、働く仲間と協同できる関係づくりを進めていきたい、と。

三年間ともに歩んだ学童保育時代の仲間とどうネットワークを強め、どう子育て支援の輪を広げていくか。これも大きな課題だ。

もっと広く仕事おこしの実践を創造し、地域の協同性を高め、市民・働く者が本当に主体者として存在する状態をつくりだすことによつてこそ、〃うちの子どもも本当に守られる〃安心して子どもを産み育てられる〃と思える社会が生み出されるのであろう。

課題は多いが、ワーカーズ大野城事業所の仲間たちは、そんな新たな歴史を確かに切り開きつつある。

〔松沢常夫〕